論文

「三百年前の遺跡」としての聖母マリア教会

―森鷗外『舞姫』「古寺」考証―

神山伸弘

一　はじめに

森鷗外の『舞姫』で太田豊太郎がエリスと出会う「古寺」のモデルが研究者の間ではっきりしない。[1]

もちろん、それがベルリンの「クロステル巷」にあることは、テキストに明記されている。しかし、鷗外が在住した当時の「クロステル街」(Kloster-str.)は、やたらと長い。[2] おおむね九百メートルに及ぶ。そのせいか知らぬが、そこに建っている教会が複数ある。街路の名前の由来となるクロスター教会(Klosterkirche)のほか、パロヒアル教会(Parochialkirche)やフランス教会(Französische Kirche)が正面を街路に向けて建っている。また、街路から背後を伺うことができる聖母マリア教会(St. Marien-Kirche)もある。

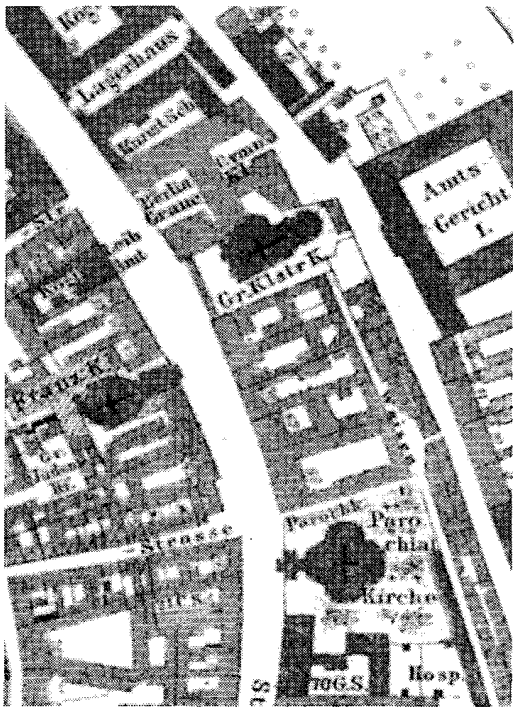
もちろん、「古寺」のモデルに必要な条件は、「クロステル巷」という場所規定以外にもある。「古寺」は、「人家」・「居酒屋」・「貸家などに向かひて、凹字の形に引き込みて建てられたる、この三百年前の遺跡」と言い換えられている。したがって、「人家」・「居酒屋」・「貸家」という教会の対面状況をどう考えるか。教会が「凹字の形に引き込みて」とはいかなる事態を指示するか。「三百年前の遺跡」に込められた意味は何か。「古寺」のモデルを同定するには、課題とすべきことが多い。

本稿では、あくまで、「古寺」のモデルの考証を行う。「国文学者」が捏造する「物語の意志」なるものには関わらない。

二　三百年前の遺跡？

手始めに、「三百年前の遺跡」について。

「三百年前」になにごとがあったのかはともかく、先に指摘し



【図1】クロスター教会、パロヒアル教会、フランス教会周辺（1888年）

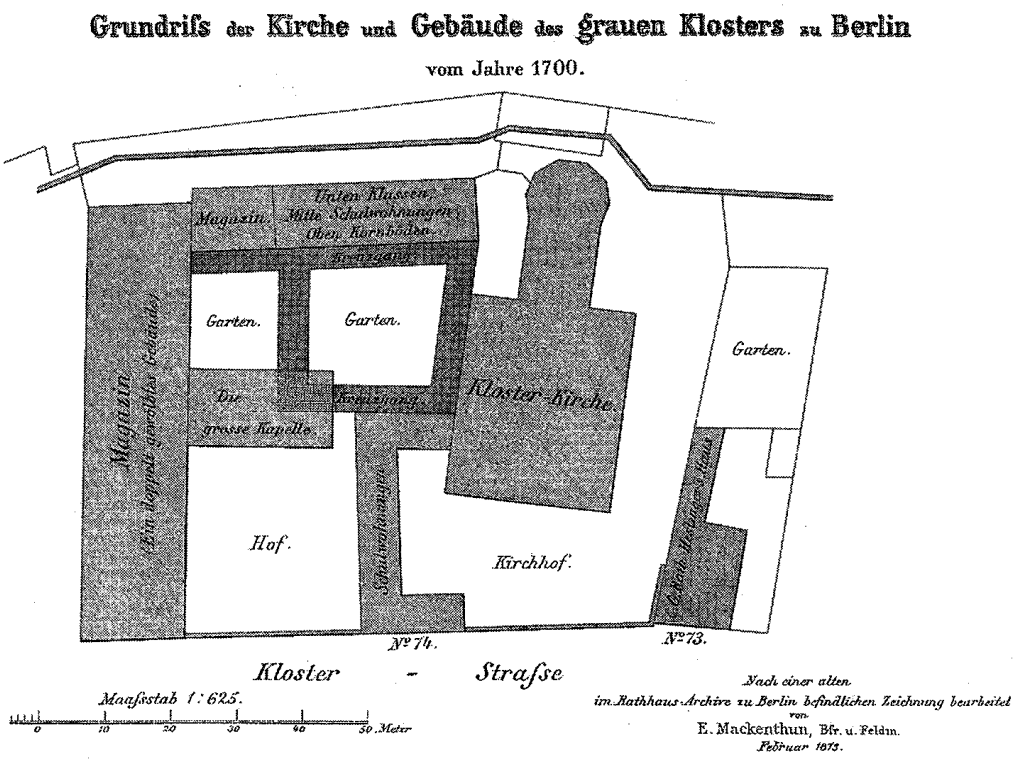
た四教会の歴史を簡単に確認するだけで、そのうち二つが「古寺」のモデルとして直ちに失格と判明する。すなわち、パロヒアル教会は一六九五年から一七〇三年にかけて、フランス教会は一七二六年に建設されたとされるから、[3] 一八八〇年代当時で「三百年前」に案内することのできるなにごともありえない。なお、念のために、地図から窺えるこの二つの教会それぞれの平面図形を確認しておくとよい。図1[4]のうち、パロヒアル教会（Parochial Kirche）にも、フランス教会（Franz. K.）にも、「凹」と視認できる要素がいささかも見当たらない。そのいずれかが当該モデルだとする説は、すでに清算されているとみてよいだろう。[5]

「古寺」のモデルをめぐる問題の焦点は、クロスター教会と考えるか、聖母マリア教会と考えるかに絞られるといってよいだろう。[6] ところが、厄介なことに、開基という点では、鷗外の滞独時に近い時点で刊行された旅行書において、クロスター教会は一二九〇年、聖母マリア教会のは十三世紀後半とされている。[7] この点を踏まえれば、いずれも、「三百年前」どころか、その倍の六百年も前に遡る教会ということになる。

いずれも「古」いことは確かだが、なにかの間違いか？　と、鷗外の記述を疑いたくなるところである。あるいは、気楽に、たかが小説のこと、さしたる根拠もなくあってずっぽうに記したまで、と、おのが怠惰をさし措いて、鷗外を批判してみせることもできるかもしれない。しかし、いやしくも「学問」と称するならば、まずは鷗外の取材に善意を想定して、「三百年前」と語りうる根拠を追究してみるべきところである。

三　六百年前のクロスター教会

クロスター教会は、フランシスコ会修道士に対して地所と建物が寄贈されたところに発祥する。すなわち、一二七一年、修道院を設置するための地所をブランデンブルク辺境伯オットー五世とアルブレヒト三世が譲渡し、一二九〇年、ベルリンとテンペルホーフの間に所在したレンガ製造工場（Ziegelei）を騎士



【図2】ベルリン・グラウエス・クロスターの教会および建造物平面図（1700年）

ヤーコプ・フォン・ネベデが寄贈したことに起源をもつ。[8]

レンガによる最初期の建物は、みずから製造したものを建材として一二九〇年代に築かれたとみられる。開基二百年を記念して一四七一年から七四年にかけて教会隣接の修道院で大掛かりな建築が行われ、大礼拝堂（große Kapelle）が建てられた。また、ルターによる宗教改革の開始直前一五一六年にできたのが、アーチ天井の部屋を二つもつ長堂（Langhaus）である。[9] クロスター教会の配置状況を理解するために、ハイデマンの『ベルリンのグラウエン・クロスターの歴史』の巻末に載せられた図版を図2として掲げておく。

ベルリンは、宗教改革によってプロテスタントに改宗し、一五四〇年、クロスター教会は、祭具を取り上げられ、カトリックによる祭式ができなくなる。修道士たちが改革を受け入れていくなかで、一五七一年、最後の修道士が亡くなると、修道院も閉じられた。[10]

宗教改革と同時にベルリンの教育組織も変化していく。教区学校（Pfarrschule）であるニコライ学校（Nikolaischule）とマリア学校（Marienschule）は、一五四〇年、前者に統合されるが、一五七三年、教会視察が行われるなかで、ニコライ学校の施設の不十分さが指摘された。これを契機に、旧クロスター修道院の一部を学校に転用する請願が選帝侯になされ、許可される。ここに、ニコライ学校を吸収して新たにギムナジウムが開学し

た。一五七四年二月二四日のことである。[11]

旧修道院を学校に転用するために、当然ながらその建物群は改造された。そのうち、最初期のものとして残ったのは、学校宿舎（Schulwohnungen）として活用された建物と、教会（Kirche）である。教会もその折に屋根を葺きかえたが、ここは、生徒にとって、年間を通して祭式を執り行う場となったのである。[12]

クロスター教会そのものは、ギムナジウムの開学に左右されることなく、十三世紀末にできあがった基本的な構造を後世にとどめることになる。[13] 鷗外の滞独時を遡ること「三百年前」のもとのしてクロスター街から展望できる建物は、最大限譲歩したとしても長堂なのであって、教会のうち「三百年前」のものとして可能性があるのは、葺きかえられた屋根の部分である。

四　クロスター教会は三〇年超前の新品

クロスター教会の建物としての成立年代をめぐる問題は、以上で尽きているわけではない。というのも、クロスター教会は、鷗外の滞独時をわずかに遡る、「一八四四年に全面的に復興され、フォン・クヴァスト（von Quast）の設計によりゴチック風の柱廊（Säulengang）が街路に面して建てられた」[14]と一般の旅行書でも記されており、その「新装性」は周知の事柄であったからである。「古寺」の古さが外面性として視覚に訴えるものである以上、ここで伝えられた全面復興の経緯と範囲およびその評価が明確にされる必要がある。

一七一九年にクロスター教会の内装は一新されるが、それ以後は、手を入れることなく推移した。一七七四年のギムナジウム創立二〇〇年の時点では、建て直しが必要と思われるほど荒廃していたとされる。ナポレオンからの解放戦争の後、まもなくして、教団の関心が高まり、建築物としての価値が再評価されて、教会の「徹底的な復興」が求められるようになった。一八二八年には、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世がそのための寄附事業に認可を出したが、復興の着手は、一八四二年となり、工期は二年必要とされた。[15] 復興直前の荒廃した面影は、図3[16]に示すグレゴロヴィウスの鉛筆画に窺える。

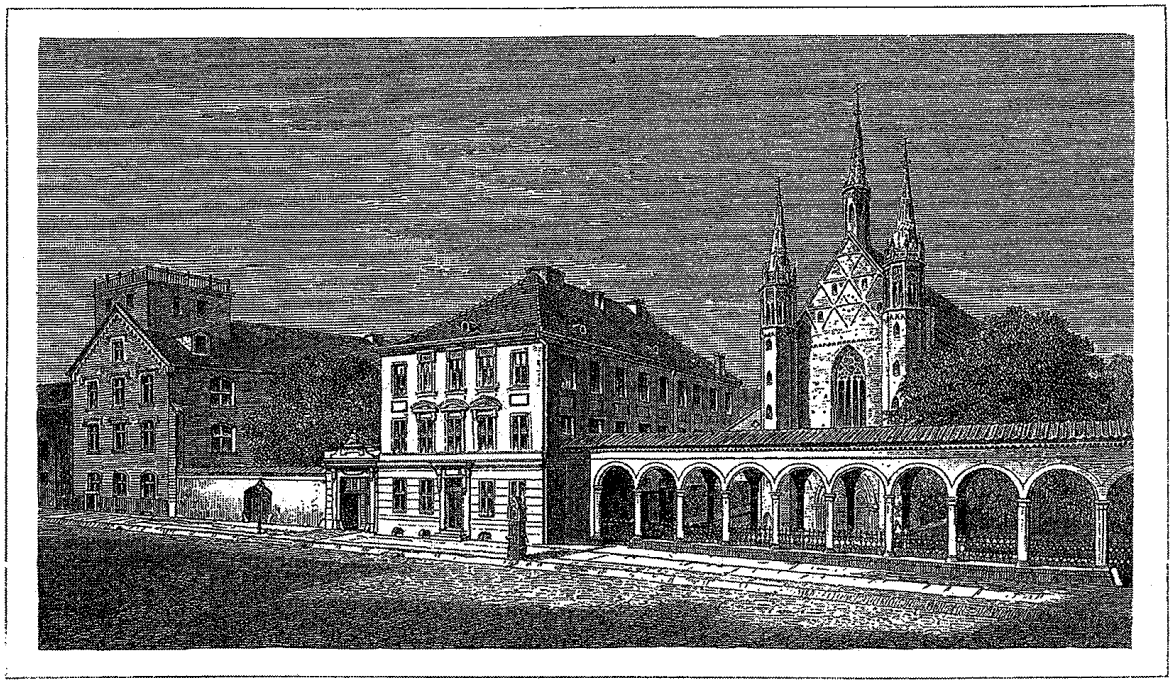
実際の工事では、内装としては、漆喰をはがしてレンガを露出させ、これに見合った塗装がなされたが、外装としては、正面の門（Hauptportal）の両脇にそれぞれ塔（Thurm）が、また西側切妻の先端には鐘楼（Dachreiter）が設けられた。さらに、街路に面しては、以前にあった壁を取り払い、アーチ型の柱廊を築いた。[17]

このように復興されたクロスター教会は、外面的には新品同様といわざるをえない代物である。当時、マルク・ブランデンブルク古代遺産研究保存協会は、その復興事業に反対し、フォン・クヴァストを攻撃した。「この貴重な文化遺産の復興にあた

って、その教会建築の根源的な姿と本来の形態を明るみに出すことに限定するのではなく、むしろ本質的に新しい追加や着想にまで及んでいる」。また、新聞紙上でも、「根源的で純粋なものだけが決定的な価値を有する。我々は、ベルリンにおいて、古めかしく見えるものではなく、現実的に古いものを求めているのである」との批判があった。しかし、これらが聞き入れられることはなかったのである。[18]

図4は、ハイデマンの前掲書の巻頭に載せられた図版であり、一八七四年の模様を伝えている。この図は、鷗外が目撃したものとほぼ同一と考えてよいだろう。これを**図3**と充分に比較対

【図3】クロスター教会、南西からの眺望
(C. T. Gregorovius, 1848年)



Das graue Kloster in Berlin
im Jahre 1874.

【図4】ベルリン・グラウエス・クロスター（1874年）

照されたい。街路に直面する柱廊は、まったくの新営。この柱廊越しに見える教会のうち、ピカピカの塔と鐘楼は、教会の本体から張り出してきたものである。それらは、鷗外にとって高々「三十年」を超える程度の前のものであって、決して「三百年前の遺跡」ではありえない。

根源的なものとはかけ離れた新しいものだと当時の世論自身が批判した教会の姿が、鷗外の目にかかると「古寺」、「遺跡」と映るというのであれば、そうした主張は、鷗外の審美眼を、また真贋を見抜く力を徹底的に貶める以外にないであろう。

五　聖母マリア教会は約三百年前に今日の原型が完成

聖母マリア教会は、十三世紀前半にベルリンが北に発展していくさいに創設され、その後半には基本的な部分が作られたとみられている[19]。その定礎は、ほぼ一二七〇年になされたとみられ、この教会への初の言及は一二九二年の免償状（Ablaßbrief）に認められるが、さらに二年後の免償状でも言及がなされており、「一二九四年に教会が完成した」と考えられている[20]。もっとも、教会の建造そのものがどのような経過をたどったかについては、不明のままである。

しかし、一三八〇年のベルリン大火において、この教会が焼失したとの記述が残されている[21]。「一三八〇年八月一一日の火事によって、教会の屋根は焼失し、アーチ天井は倒壊して、建物の壁も損傷した。だが、この元の壁の上に昔と同様の寸法でいくぶん新しい形式を取り入れて再建をした。十三世紀に由来する古い建物が再興したわけである[22]」。この再建は、十三世紀末から十四世紀冒頭にかけてなされたとみられるが、しかし、現代に見られる形のものになりきっていない。尖塔がないのである。

聖母マリア教会の姿のうちもっとも見とれてしまうものは、真西に向いた正面の尖塔だろう。これ抜きに聖母マリア教会は語れない。その尖塔の建設が文献で確かめられるのは、一四一八年が初めてであるが[23]、費用の積み立てが始まっただけのことである[24]。尖塔は、一四九〇年に至っても完成しない。たまりかねて、ブランデンブルク司教は、信徒に寄付をするよう訓戒する。しかし、完成を目前にして、一五一四年には尖塔が炎上する。塔上の飾りが木造だったのである。一五三八年には、新しい尖塔が築かれることになるが、これは今日のものとはまったく違った様相のものであった（図5）[25]。それ以後、最終的に一七八九・九〇年にラングハンスが尖塔を銅版張りにするまでは、同じような災難に何度も見舞われる[26]。

図6は、十八世紀の銅版画であるが、その絵のなかには、次のように記されている。「ベルリンのルター派聖母マリア教会は、一五一四年ごろ建設された。しかし、尖塔は、一六六一年に完全に焼失したので、その完成は一六六六年である[27]」。一六六一年

の火災は、落雷による。

ここで一八八八年を起点に考えれば、「一五一四年」（本来は一五三八年であるべきだろうが）に注目すると三七四年前に、「一六六六年」に注目すると二二二年前に、聖母マリア教会の原型を求める認識が現にあったということである。[28] 我々にとって重要なことは、聖母マリア教会が、十三世紀後半の開基であるにもかかわらず、鷗外のベルリン在住当時からみて、二百年ないし四百年前のものと一般に理解されていた事実があることである。

【図5】1538年建築の塔がある聖母マリア教会（1598年）

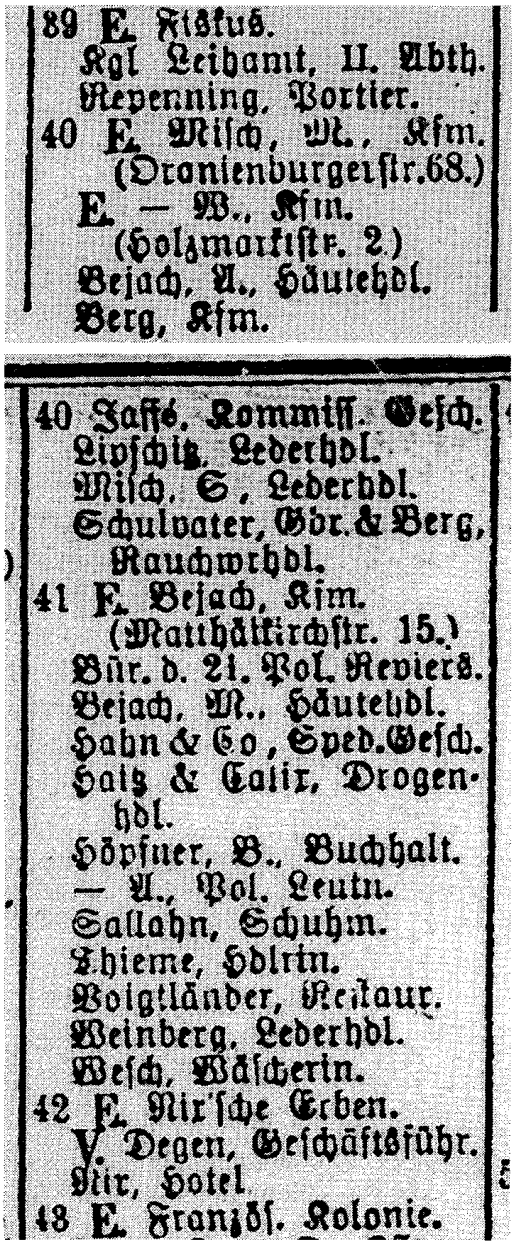
六　教会の向かいに住んだ人びと

「古寺」は、「人家」・「居酒屋」・「貸家」「などに向かひて」「建てられたる」ものとして規定されている。そして、さらに、「人家」・「居酒屋」・「貸家」のそれぞれが、詳細に内容規定されて

【図6】聖母マリア教会
（Johann David Schleuen の銅版画、18世紀）

いる。すなわち、「人家」の場合、その「楼上」には「木欄」があって、そこに「敷布、襦袢」が夜にもかかわらず「干」されている。「居酒屋」の場合、「ユダヤ教徒の翁が戸前にたたず」んでいる。「貸家」の場合、階上への階段と地下への階段が別にあって、地下には「鍛冶」屋が住んでいる。

固有名の伴わないこれらの規定にすべて合致する情景を一八八七年・八八年のベルリンに捜し求めるのは、なかなか至難の業である。そこで、勢い、エリスが屋根裏部屋に住んでいる、したがって劣悪な住環境にある、と評価したうえで、「古寺」の前景全般が劣悪な生活環境にあると推論し[29]、もってそれに合致するイメージをどこからか借りてきたりしてこと足れりとなす[30]、こうした手法で居直る例が多い。こうした解釈の道筋は、論理的な跳躍の積み重ねのうえに成り立っている――したがって無根拠である――が、こうした「国文学」の解釈手法に哲学は介入しない[31]。本論としては、こうした手法では「古寺」のモデルを決して同定できないことが理解されさえすればよい。けだし、それでは、つねに、好みの拡大解釈、好みのイメージで議論を混ぜ返すことができてしまうからである。



【図7】クロスター街39～43番地（1887年）

モデルを検討する立場からすると、「古寺」の向こう側に現実的にあったものや、あった人びとはどういうものか、と考える。その際、言うまでもなく、鷗外の与えた規定のうち、外面的に確認しえた要素に着目する必要がある。

七　クロスター教会前――毛皮商とレストラン、ホテル

まず、クロスター街の状況。

クロスター教会の向こうにあたるのは、図1を振返るとよいが、クロスター街四〇番地から四二番地にかけてである。三九番地には王立貸付所（Kgl. Leihamt）、四三番地にはフランス教会がある。その先は、「筋向かひ」であろう。

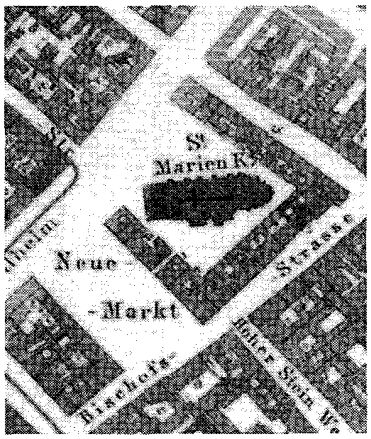
【図8】クロスター街42番地一部（左端、4階建）、41番地（2階建）、40番地（4階建）以下（1892年）

クロスター街四〇番地の住人の職業は、一八八七年において、毛皮衣類商（Häutehdl.）、商人（kfm.）、店員（Kommiss Gesch.）、皮革商（Lederhdl.）、毛皮商（Rauchwrhdl.）である（図7）[32]。これは、八八年においても変わらないが、その建物は、同年四月一日以降取り壊すと予告され、八九年には建設中となる[33]。要するに、皮革衣料ないし皮革材料を営む商店があって、その製品が街路から垣間見られたであろう。鷗外は、四月一日以降、勤務の方角が変わるから、この店が移転したことを知らなかったかもしれない。

同四一番地には、「第二一警察分署（21. Pol. Reviers.）」のオフィス（Bür.）がある。その他、そこの住人の職業は、雑多である。一八八七年において、Bejachという毛皮衣類商（Häutehdl.）、運送業（Sped. Gesch.）会社、薬物商（Drogenhdl.）、会計士（Buchhalt.）、警察官（Pol. Leutn.）、靴屋（Schuhm.）、商人女（Hdlrin.）、レストラン（Restaur.）、皮革商（Lederhdl.）、皿洗い女（Wäscherin）。これは、八八年においても基本的に変わらない。

そして、同四二番地。ここは、ニックス・ホテル（Nix Hotel）である。

実は、一八九二年当時のものとされるものであれば、この場所を直に撮影している写真がある（図8）[34]。このなかで、左端が四二番地、その右の背の低い二階建てが四一番地、次の四階建てが四〇番地である。この写真がこうした番地を捉えていると



【図9】聖母マリア教会周辺（1888年）

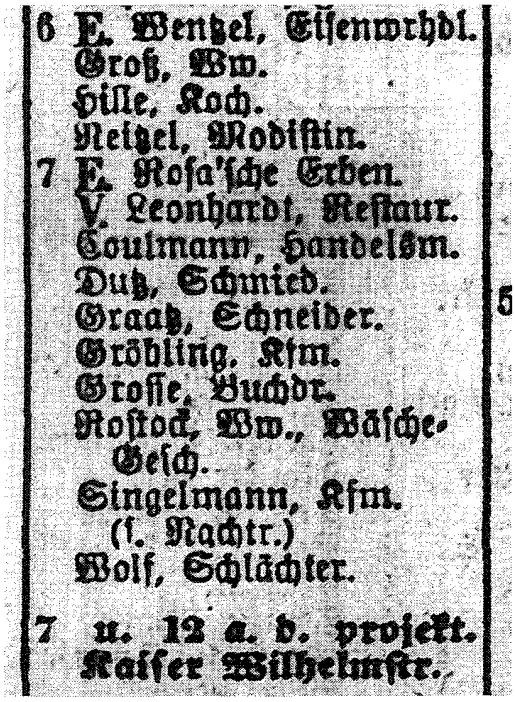
確言できるのは、四一番地の左の入り口にBejachという表示があり、またその脇にRestaurant zu Lederbörseと記されているからである。けだし、この番地といい、隣の番地といい、皮革商が多いことからくるのであろう。

このような状況では、レストランを居酒屋とみなすことは可能かもしれないが、教会の向かいに半地下の鍛冶屋が陣取る可能性はない。「古寺」の前の状況とは基本的に無縁といえる。

八　聖母マリア教会前——居酒屋と鍛冶屋

他方、聖母マリア教会の向かいはどうか（図9）[35]。

その入り口に間近なところは、マリエンキルヒホーフ(Marienkirchhof)の一番地と二番地だが、これは、それぞれ、ノイア・マルクト(Neuer Markt)七番地と六番地に同等である[36]。ノイア・マルクト七番地には、一八八七年に、レストラン(Resaur.)があり、鍛冶屋(Schmied)がいる（図10）[37]。このほかに、仕立て屋(Schneider)、商人(Kfm.)、出版者(Buchdr.)、洗濯屋(Wäsche Gesch.)、肉屋(Schlächter)がいる。こうした構成は、八八年でも基本的には変わらないが、洗濯屋が消えて、タバコ屋、牛乳屋が入ってくる[38]。

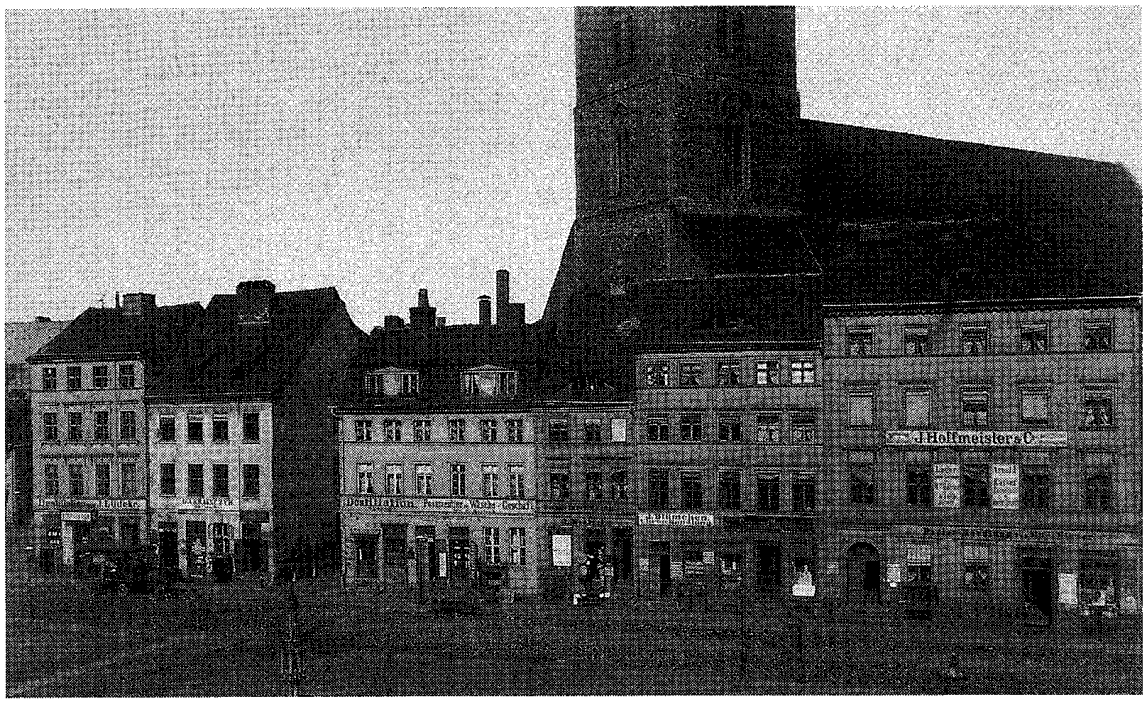

6 E. Wentzel, Eisenwrhdl.
Groß, Ww.
Hille, Koch.
Neigel, Modistin.
7 E. Rosa'sche Erben.
V. Leonhardt, Restaur.
Coulmann, Handelsm.
Duß, Schmied.
Graaß, Schneider.
Gröbling, Kfm.
Grosse, Buchdr.
Rostock, Ww., Wäsche-Gesch.
Singelmann, Kfm. (f. Nachtr.)
Wolf, Schlächter.
7 u. 12 a. d. projekt. Kaiser Wilhelmstr.

【図10】ノイア・マルクト6～7番地（1887年）

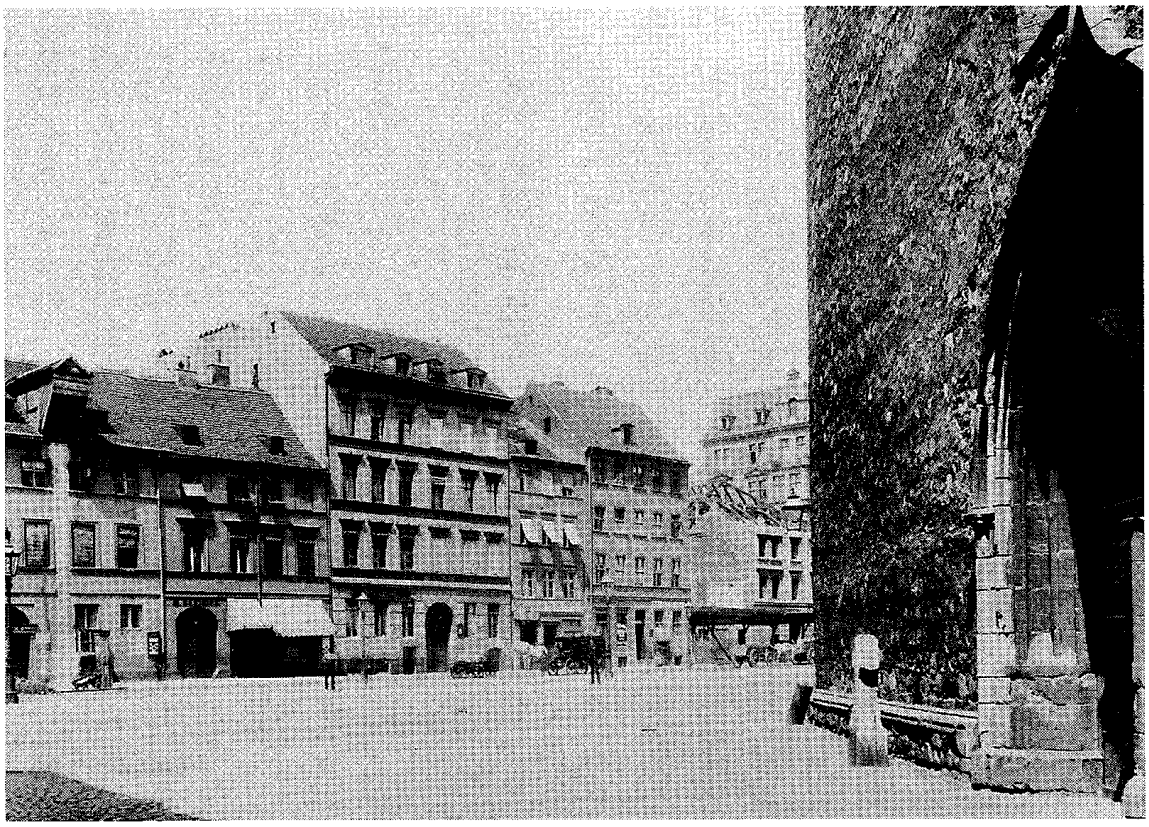
同六番地には、Wentzelという金物屋(Eisenwrhdl.)、料理人(Koch)、Neigelという婦人服屋(Modistin)がいる。

これらの番地を教会側からとらえる写真は、残念ながら現時点では見出せないのだが、これを裏側であるマルクト側からとらえる写真なら、一八八〇年頃のものがある（図11）[39]。左端の二軒は、八六年に取り壊される——左から——ノイア・マルクト九番地、八番地である。

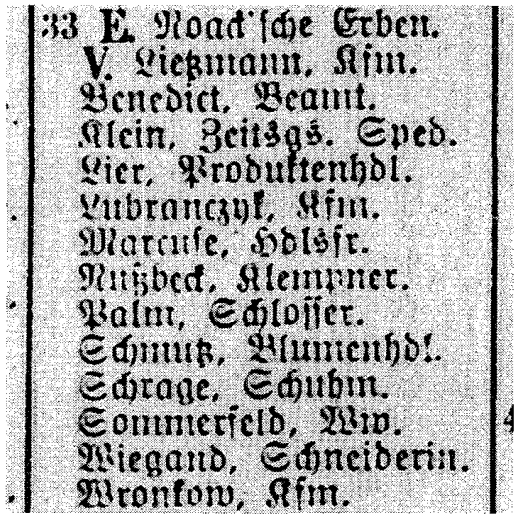
ガッセを隔てて七番地には、写真においてDestillationの表示がある。これは、まさに、「居酒屋」のことである。また、半地



【図11】ノイア・マルクト越しの聖母マリア教会（1880年頃）



【図12】聖母マリア教会向かいの状況（1888年）


33 E. Noack'sche Erben.
V. Lietzmann, Kfm.
Benedict, Beamt.
Klein, Zeitsgs. Sped.
Lier, Produktenhdl.
Lubranczyk, Kfm.
Marcuse, Hdlsfr.
Nußbeck, Klempner.
Palm, Schlosser.
Schmutz, Blumenhdl.
Schrage, Schuhm.
Sommerfeld, Wwe.
Wiegand, Schneiderin.
Wronkow, Kfm.

【図13】カイザー・ヴィルヘルム街33番地（1889年）

下への入り口も認められる。鍛冶屋の仕事が火を扱う本性上地下が望ましいとすれば、ここの半地下にこそ鍛冶屋はいるであろう。

その右隣の六番地には、写真においてEisenwaren HandlungさらにL. Wentzelと記されている。いずれの建物にも屋根裏部屋はあって、第四層目が屋根裏部屋となる建物は、さらに右隣の五番地である。もっとも、この五番地には、「大戸」がないとみるならば、こちらを「筋向い」とするのではなく、聖母マリア教会の横腹を眺めるパーペン街（Papenstr.）にそれを求めてもいいだろう。図12[40]のうち真ん中の四階建ての建物は、大戸があるし、屋根裏部屋の窓も四つ具えている。ここは、一八八七年当時、パーペン街（Papenstr.）五・六番地で、八八年には、カイザー・ウィルヘルム街（Kaiser Wilhelmstr.）二三三番地である。ここには、八八年にBehrendtという女仕立物師[41]、八九年にWiegandという女仕立物師（Schneiderin）が認められる（図13[42]）。

図11の写真そのものは、マルクト側からとらえたものだという制約があるものの、建物の構造上、同様のことが教会側からも認められる可能性がある。

このように、聖母マリア教会の向かいであれば、洗濯物をどう理解するか、ユダヤ教徒との関連はどうか、というなお解明すべき問題はあるとしても、居酒屋といい鍛冶屋といい、鷗外が「古寺」の叙述にあたって登場させた建物や人物が勢揃いしてしまう。

九　結びに代えて

森鷗外が『舞姫』で「古寺」と表現した寺院のモデルは、本稿での検討を通じて、改めて、聖母マリア教会以外にありえない、と断ずることができる。他の議論は、その信仰告白のためにどのような「物語の意志」を持ち出そうとも、ベルリンの都市空間と歴史に即すれば謬論・妄想にすぎない。

それでもなお、「凹字の形に引き込みて」をどうする、「閉ざしたる寺門の扉」をどうする、という反問が生じるかもしれない。これらについては、すでに別の機会に言及しているので、この場では詳論しない[43]。ただ、次のことは、この場で指摘しておくべきだろう。「古寺」のモデルを聖母マリア教会と想定すれば、「凹字の形に」の「に」は場所規定となり、「寺門」は教会

の本堂の入り口となる。そして、ベルリンの現実は、その通りのものとしてあった。しかし、それをクロスター教会と想定すれば、「に」は状態規定として理解可能かもしれないが、「寺門」は教会の回廊の入り口とならざるをえず、ここからしてすでに事実認識の歪曲が始まる。そして、その後は、その他一切のベルリン像が奇怪に歪んでいかざるをえない。

こうした事情は、たんなる直観を固守しようとして天動説を弥縫したときに現れたものとまったく同質である。いまや、「古寺」のモデルとしてクロスター教会説に左袒する者は、この説がもともと「クロステル巷だからクロスター教会だ」という、周囲の事実を確かめずに直観的に飛びついた語呂合せ以上に根拠もなかった出発点を直視すべきだろう。この出発点を維持することのできる事実が泉のごとく湧き出たのであれば、幸いであった。しかし、『舞姫』のコンテキストも、ベルリンの空間も、これを一切支持しない。そこで、ついに、ベルリンの空間を「物語の意志」と称して歪めていく。惑星も地球の周りを廻りますように…。

逆に、すべてのテキスト上のファクターをベルリンの空間の事実と整合的に理解しようとするならば、そうした奇怪な像はたちどころに消えてなくなる。言葉を字義通りに理解するだけで、現実と対応するイメージが素直に形成される。

しかし、「国文学」の「権威」は、こうした素朴さでは商売が成り立たない。「学問」は媒介に本質があり、この媒介が不可思議であればあるほど、その秘教的な「権威」も高まろうというものだ。だから、この「権威」は、「『舞姫』の「古寺」のモデル＝マリエン教会説は、この辺で清算されるべき」だと鳴り物を入れ、「物語の意志」なる亡霊に煩悶し続けるだろう。だが、良識がそこに見出すものは、事実を調べることもしない、事実の教えることに対して謙虚にもなれない曲学の姿である。

註

(1) このことについては、すでに拙稿「「普請中」のベルリン――一八八七年・八八年当時の森鷗外第二・第三住居環境考――」『跡見学園女子大学紀要』第三三号、二〇〇〇年、一四～一五頁で諸説について検討し、聖母マリア教会が「古寺」のモデルであると同定した。

(2) 「巷」と「街」を鷗外が意図的に区別しているとの指摘がある。この指摘については、山下萬里「森鷗外『舞姫』の舞台――ベルリンのユダヤ人（二）――」『拓殖大学論集　人文・自然科学』第一巻一号、一九九三年、五一頁以下参照。山下の主張は、鷗外の自筆草稿で、当初「クロステル巷路」とあったものから「路」が削除されているので、「巷」は「巷路」すなわち「小路＝ガッセ gasse」であると推論する。しかし、この推論には保証がない。「巷路」とすることで山下のように読まれたくないがゆえに「路」を削除した、という推論も同様に成り立つからである。むしろ、叙述の変化に注目するなら、それをガッセと読ませない鷗外の工夫と考えるほうが優れている。山下の議論は、なぜ「巷路」であっては

いけないのかというテキストの最終現状を説明できない点で、支持できない。ただし、叙述の変化の観点からすると、鷗外が「巷」と「街」を「使い分けている」との指摘は重要である。これによれば、「古寺」は、「クロステル巷」にあるとされるがゆえに「クロステル街」に直面する、と解する必要がなくなる。なお、井上靖は、「クロステル街」と区別して、「クロステル巷」を「クロステル地区」と訳す。森鷗外『現代語訳　舞姫』井上靖訳、ちくま文庫、二〇〇六年、二二、五六頁参照。ただし、同書所収の「舞姫（原文）」での註では、「巷」と「街」が同名とみなされている。前掲書、一二六頁参照。

（3）Vgl. *STRAUBE's Illustrierter Führer durch Berlin, Potsdam und Umgebung*, Berlin [1897] (abgek. *STRAUBE*), S. 59. Vgl. *Friedrich Nicolais Beschreibung Berlins 1786*, Miniaturen zur Geschichte, Kultur und Denkmalpflege Berlins, Nr. 11, hrsg. v. K. Gerlach, Berlin 1983 (abgek. *NICOLAI*), S. 31.

（4）*Situations-Plan, van der Haupt-und Residenz-Stadt Berlin und Umgegend*, bearb. von W. Liebenow, Berlin 1888.

（5）長谷川泉は、「私は『舞姫』の古寺院をパロヒアル教会であると推論し、『森鷗外論考』や『森鷗外』の著においては、この写真を掲げたことがある」が、篠原正瑛の論文に触れて、これを撤回し、篠原の論断に従うとしている。長谷川泉『長谷川泉著作選③　鷗外「キタ・セクスアリス」考』、明治書院、一九九一年、三九六頁参照。しかし、真杉秀樹は、近年パロヒアル教会説を再主張している。真杉秀樹「『舞姫』におけるアルト・ベルリンの地誌――「クロステル巷の古寺」とパロヒアル・シュトラーセを中心に――」『鷗外』六四号、一九九九年、一八～三九頁。

（6）なお、このほかに、ハイデロイター小路に面するシナゴーグを「古寺」のモデルとして主張する山下萬里の議論がある。山下、前掲論文参照。前掲拙稿は、その主張を支える主要な論拠を批判したが、本註では、そのシナゴーグについても、パロヒアル教会とフランス教会を当該モデルとして斥けると同様の失格理由があることを補足する。すなわち、フリードリヒ・ニコライは、ハイデロイター小路とそこに建つシナゴーグについて次のように記す。「ハイデロイター小路（Heidereutergasse）。この小路は、ローゼン街（Rosenstraße）に通じていて、以前は刑吏小路（Bödel- oder Büttelgasse）と呼ばれていた。その小路には、かなり昔から刑場（Scharfrichterei）があった。一六七八年、大選帝侯は、この刑場を市外に移したいと思ったが、ベルリンの参事会は、これに反対した。一七二四年、国王フリードリヒ〔一世〕は、この刑場をシュパンダウアー門外に移させた。／この小路には、I. ユダヤ教徒のシナゴーグ（Synagoge）がある。このシナゴーグは、老ケンメータ（älterer Kemmeter）によって一七〇〇年に建てられた。そのそばには、シナゴーグの所有する建物がある」。*NICOLAI*, S. 28.『ベルリン・ミッテ事典』によれば、旧シナゴーグ（Alte Synagoge）の定礎は、一七一二年五月九日、老ケンメータのフルネームは、Michael Kemmeter とされる。Vgl. *Berlin Mitte, Das Lexikon*, hrsg. v. H.-J. Mende u. K. Wernicke, Stapp Verlag GmbH. u. Edition Luisenstadt, Berlin 2001. 同事典の参照は、ルイーゼンシュタット教育教会（Luisenstädtischer Bildungsverein e.V.）のホームページによった（http://www. berlingeschichte.de/Lexikon/index.html 二〇〇七年三月現在）。ハイデロイター小路のシナゴーグについても、「三百年前」に案内すべきなにごともない。

（7）Vgl. *STRAUBE*, S. 58 f. ニコライによれば、「マリア教会は、おそらく十三世紀後半には建立されている。この教会に史料で最初に言及されるのは、一二九二年である」。*NICOKAI*, S. 29.

(8) Vgl. Julius Heidemann, *Geschichte des Grauen Klosters zu Berlin*, Weidemannsche Buchhandlung, Berlin, 1874 (abgek. *HEIDEMANN*), S. 13. Vgl. *NICOLAI*, S. 30. レンガ製造工場の寄贈を受けて、そこで生産されるレンガを建材として自家利用できたと理解する。なお、『ベルリン・ミッテ事典』によると、一二五〇～六五年の間にすでに石造りの教会堂(Saalkirche)が作られたとする。

(9) Vgl. *HEIDEMANN*, bes. S. 26f., 30f.

(10) Vgl. a. a. O., bes. S. 50.

(11) Vgl. a. a. O., bes. S. 55, 64ff.

(12) Vgl. a. a. O., S. 27, 66, 68.

(13) 一七八六年のニコライの言によれば、「教会と修道院の建物〔学校宿舎〕はかつてあったのとほとんど同様にいまでも建っている」(補記は神山)。*NICOLAI*, S. 31. クロスター教会を「遺跡」だとするならば、このような意味での歴史性をいうのであって、時野谷滋の言うような、「ギムナジウムに変わっており、『今は只本堂をのみを残し』ているという有様」だから「遺跡」で、「マリエンキルヘ」が「今日まで教会以外のものに使われたことはない」から遺跡ではない、といったことではありえない。クロスター教会は、たしかに、十六世紀に修道院の付属物ではなくなったが、教会としては機能し続けたのであり、時野谷の後半の言を一貫させるなら、クロスター教会自体も遺跡とならないだろう。時野谷滋「ジェインの題辞とクロステル巷の古寺」『関東短期大学　国語国文』第七号、一九九八年、三六頁以下参照。藤咲憲一は、こうした時野谷の議論を支持し、加えて、一九二八年の復刻地図でクロスター教会に"Ehem."(かつての)と記されているからこの呼称は一五七四年以来のもので、だからこの教会が「遺跡」だとも主張する。この推論方法がまったくの出鱈目であることは論を俟たない。藤咲憲一「『舞姫』――「クロステル巷の古寺」考――」『鷗外』七七号、二〇〇五年、八一頁以下参照。なお、鷗外学の「権威」小泉浩一郎は、こうしたペーパーを「必読の御論」と賞賛してやまない。

(14) *STRAUBE*, S. 59. なお、これ以前にも幾度か改修がなされている。教会の外装にだけ限るならば、次のことが指摘されている。一六一七年、屋根へ塔の新造。一七一二年、火事により焼失した屋根と塔の復元。Vgl. *HEIDEMANN*, S. 41.

(15) Vgl. *HEIDEMANN*, S. 41f.

(16) "Ansicht von Südwesten [der Klosterkirche]. Grundierte Bleistiftzeichnung von C. T. Gregorovius, 1848", in: *Alte Berliner Kirchen*, bearb. v. W. Boeck u. H. Richartz, Atlantis-Verlag, Berlin 1937, S.25. なお、クロスター街の様子を含む全景については、次を参照。"Schwartz, Die Klosterstraße und die Streit'sche Stiftung. Stahlstich von Barber, 1832", in: Wolfgang Gottschalk, *Altberliner Kirchen in historischen Ansichten*, Verlag Weidlich, Würzburg 1985. この図は、別の経由で山下萬里が紹介している。山下萬里「『舞姫』の舞台に関する補注」『鷗外』七八号、二〇〇六年二月、六七頁参照。

(17) Vgl. *HEIDEMANN*, S. 42.

(18) Vgl. Gerhard Bronisch, *Die Franziskaner-Klosterkirche in Berlin*, Unveränderter Abdruck aus der Nummer 4 des 50. Jahrgangs der "Mitteilungen des Vereins für die Geschichte Berlins", [1933], S. 137f.

(19) Vgl. *Die Marienkirche zu Berlin*, Das christliche Denkmal, heft 90, hrsg. V. F. Lössler, Berlin 1985 (abgek. *LÖSSLER*), S. 5.

(20) Vgl. Gustav Leh, *Die St.-Marien-Kirche zu Berlin, Ihre Geschichte und ihr Bild*, Evangelische Verlagsanstalt Berlin, Berlin 1957 (abgek. *LEH*), S. 13f.

(21) Vgl. a. a. O., S. 15.
(22) A. a. O., S. 16.
(23) Vgl. *LÖSSLER*, S. 12.
(24) Vgl. *LEH*, S. 17.
(25) *LEH*, S. 81.
(26) Vgl. *LÖSSLER*, S. 12.
(27) *LÖSSLER*, S. 13. 一五一四年は、火災のあった年もである。
(28) これらの中を採れば約三百年前となる、と主張するのは、まったくもって無思想だが、概数を求めるならば一つの解にはなる。
(29) たとえば、山下萬里は、次のように言う。「語り手からすれば、道幅狭く、両側に建物がひしめき、洗濯物で満艦飾の、猶太教徒の翁が佇む路地というだけで、穢い、襤褸、古い、汚れているといった言葉をことさら並べるまでもなく、この「巷」はそうしたところだと、自明のこととして読者にも了解されているはずなのである」。山下萬里「訂正の訂正二題、その他―『舞姫』の舞台に関して―」『鷗外』第七三号、二〇〇三年、一七頁。
(30) たとえば、前田愛は、片山弧村の『伯林』にある「クレーゲル街の描写」――「クレーゲルは今は桶屋、ブリキ屋、靴直し、屑屋等の細民の巣窟になつてゐて、檐下には古い荷車が横仆しになつてあつたり、汚い洗濯物が掛け並べてあつたり、路次(ママ)には鶏の一群が塵芥をつゝき廻る。」――が「『クロステル巷』のそれの詳密な脚注といったおもむきがある」として、「三百年前の遺跡と伝えられる古寺院を貧街にとりあわせることで中世の雰囲気を呼び込む」かたちで「クロステル巷」が「意識的に再構成された」とする。前田愛「BERLIN 1888（抜粋）」、森鷗外、前掲書、二〇〇頁以下参照。
(31) ただし、そうした解釈手法によって解釈者の「感想」の客観性、普遍性、したがって学問性が主張されない限りにおいてである。
(32) Vgl. *Berliner Adreß-Buch für das Jahr 1887*, unter Benutzung amtlicher Quellen redigirt von A. Ludwig, Berlin 1887, II. T. S. 196. なお、写真において四三番地は、一行目のみ。以下、Berliner Adreß-Buch を *BA.* と略し、年号、部および頁数を記す。今日では、Zentral- und Landesbibliothek Berlin がインターネットで本書の画像を提供している（http://adressbuch.zlb.de/ 二〇〇七年三月現在）。なお、図中のEは所有者（Eigenthümer）、Vは管理人（Verwalter）を示す。
(33) Vgl. *BA.*, 1888, II. T. S. 200; 1889, II. T. S. 207.
(34) Harald Brost und Laurenz Demps, *Berlin wird Weltstadt, Photographien von F. Albert Schwartz, Hof-Photograph*, Brandenburgisches Verlagshaus, Berlin 1997, S. 253. なお、本書が記す一八九二年撮影との考証は、クロスター街四一番地が一八九三年に建設中となるからであろう。Vgl. *BA.*, 1893, II. T. S. 247. 図7に見られる同四〇番地の建物は、八九年に建設された後のものであるから、図7の情景は鷗外が見たものと完全には一致しない。
(35) Situations-Plan, a. a. O.
(36) Vgl. *BA.*, 1887, II. T. S. 278.
(37) *BA.*, 1887, II. T. S. 311.
(38) Vgl. *BA.*, 1888, II. T. S. 316.
(39) "Neuer Markt und Marienkirche, F. A. Schwartz, um 1880", in: Janos Frecot/Helmut Geisert, *Berlin in frühen Photographien: 1857-1913*, Schirmer/Mosel, München 1984, S. 88.
(40) ベルリン・ランデスアルヒーフ所蔵。裏書は、"Kaiser Wilhelmstrasse, 1888".

【図13】16 das Kirchenportal (die Kirchentür) 「寺門」

(41) Vgl. *BA.*, 1888, II. T. S. 190.

(42) *BA.*, 1889, II. T. S. 197.

(43) 「寺門」は、ドイツ語では、Kirchenportal, Kirchentür などであって、教会建築物そのものの「入り口」「玄関」を示す。これと同様のことは、拙稿「『舞姫』の舞台「ベルリン」をイメージする」『ちくま』四二一号、二〇〇六年四月、二一頁で指摘した。なお、これに先んじて、山下萬里「『舞姫』の舞台に関する補注」、六四頁で同様の指摘がある。右のドイツ語と教会部分との対応関係については、図13を参照のこと。*DUDEN, Bildwörterbuch der deutschen Sprache*, 4., neu bearb. u. aktualisierte Aufl. bearb. von Meyers Lexikonredaktion in Zusammenarbeit mit der Dudenredaktion, Bd. 3, Duden-verlag, Mannheim et. a. O., 1992, Bildtafel 331, S. 573. また、「凹字の形に」が「引き込みて」を修飾することについては、拙稿「歪まぬベルリン空間――鷗外が『舞姫』で伝えたかった情景について」『國文學―解釈と教材の研究―』、二〇〇五年二月号、一六頁参照。

（なお、本稿は、跡見学園女子大学後援会外国出張補助金の支給を受けた研究成果の一部である。本稿をなすにあたって、本学教授山崎一穎氏より一部、貴重な資料の提供を受け、またご教示いただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。）